



# 國際協力事業團 研修事業部

國際協力事業團  
研修事業部





# 韓国青年招へい事業 대한민국 청년 초청 사업

JICA LIBRARY



1089082101

22139

1990

青業

JR

91-706

国際協力事業団

22139

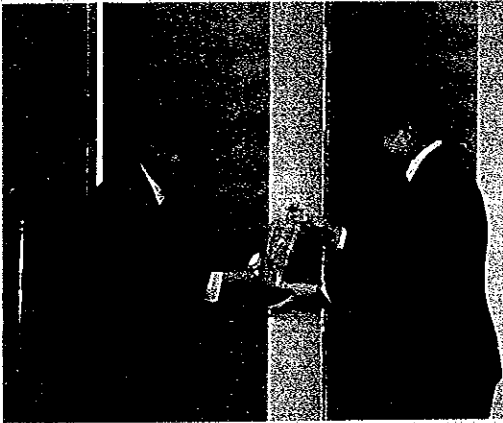
# 信頼と友情への第一歩 신뢰와 우정에게 첫걸음

平成2年度韓国青年招へい事業  
1990년도 대한민국 청년초청사업

## 歓迎会 〈환영회〉



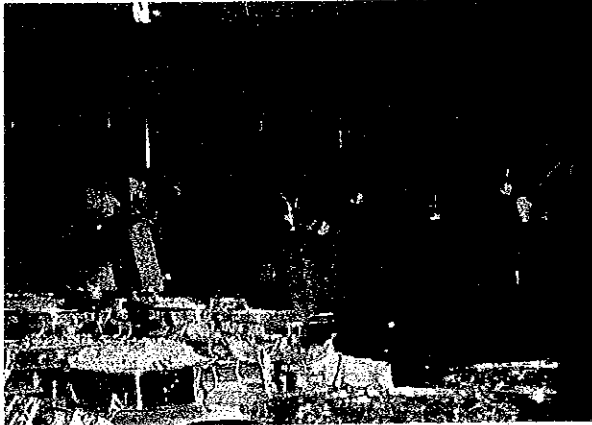
国際協力事業団岸副総裁の歓迎のあいさつ  
국제협력사업단 岸부총장 환영의 인사말



張宗澤団長より記念品の贈呈  
張宗澤단장으로부터 기념품증정



期待に胸膨らます  
기대로 마음을 부풀게 함



開講式後の懇談会  
개강식 후의 간담회

共通プログラム  
〈공통프로그램〉



和気藹々とした雰囲気の中で日本語会話練習  
화기 애매한 분위기 속에서 일본어회화  
연습



1990年韓国青年招聘事業武道鑑賞 7月13日  
日本武道館にて演武者との記念撮影

1990년 대한민국 청년 초빙 사업 무도감상 7월13일  
일본무도관에서 연무자와의 기념촬영



時のたつのも忘れて交される討論  
시간가는 것도 잊어버리고 행하여 지는 토론

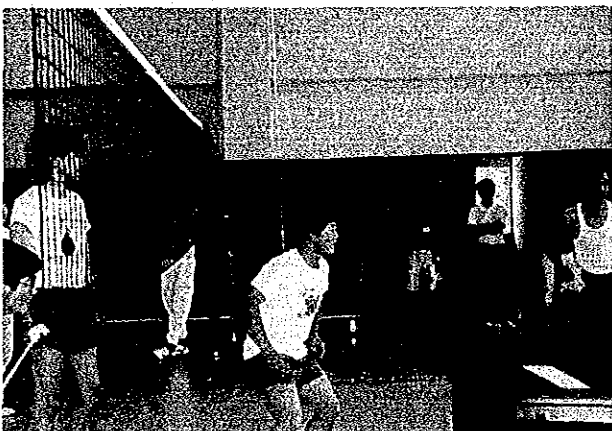
## 合宿セミナー 〈세미나〉



美しいハーモニーに思わずうっとり  
아름다운 하모니에 무의식중에 황홀한 마음



リフトの上で「はい、ポーズ！」(高尾山ハイキング)  
리프트의 에서 「네, 포즈즈」(高尾山하이킹)



日韓対抗バレーボール大会  
한일대항 배구대회



「こんがらかっています」(レクリエーションでの  
一場面) 「혼잡한」(레크레이션에서의 장면)

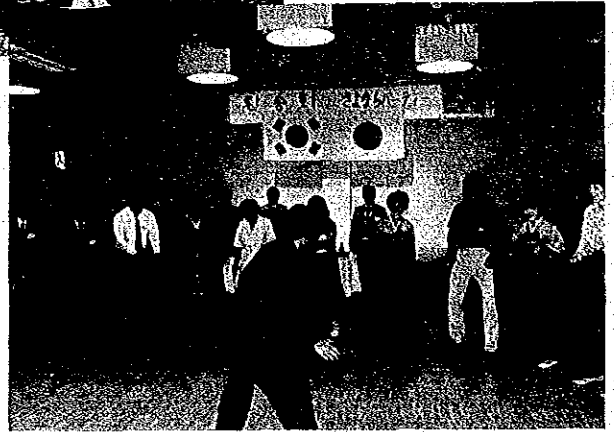


日本青年との交流の夕べ  
일본청년과의 교류의 밤



地元のガールスカウトとの交流  
지역의 걸스카우트와의 교류

## 地方プログラム 〈지방 프로그램〉



さあ、皆輪になって！  
자, 그럼 모두 둥글게 서서!



地元青年との討論会  
지역의 청년과 토론회

爽快!! ついに登頂、思わずニッコリ (立山登山)  
상쾌함!! 드디어 등정 무의식중에 미소를 (立山등산)



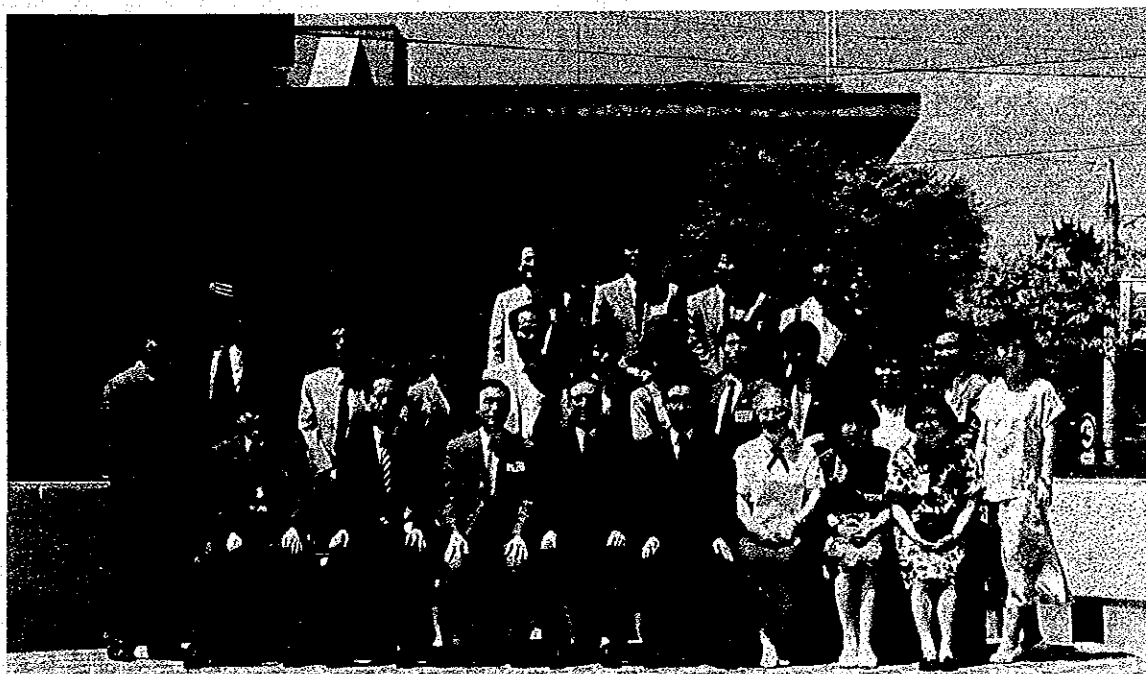


21世紀のための友情計画青森県プログラム 1990. 7. 18~27

21세기를 위한 우정계획 青森県프로그램 1990. 7. 18~27



地方での思い出を胸にねぶたの前で  
지방에서의 추억을 마음속 깊이 “네부타의 앞에서”



青森市長表敬訪問  
21세기를 위한 우정계획 青森県프로그램 1990. 7. 18~27 青森市長 예방

ホームステイ  
〈홈스테이〉



本場の味に負けない焼肉パーティー  
本道の 맛에 지지않는 불고기파티

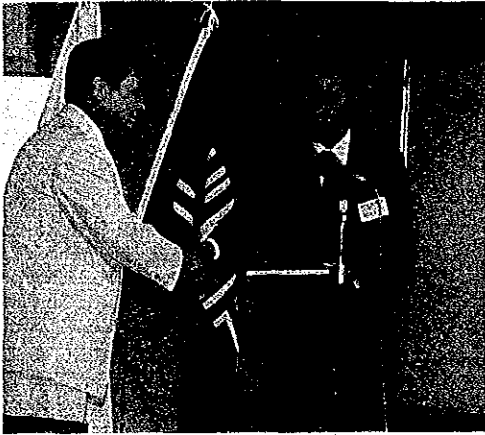
歓迎パーティー会場で  
환영파티 회장에서



# 歡送會 〈환영회〉



張宗澤團長のあいさつ  
張宗澤團長の 인사말



張宗澤團長より記念品の贈呈  
張宗澤團長으로부터 기념품증정



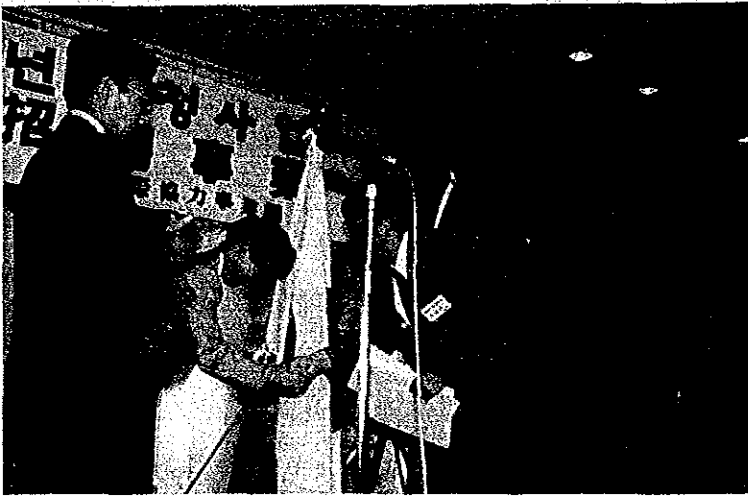
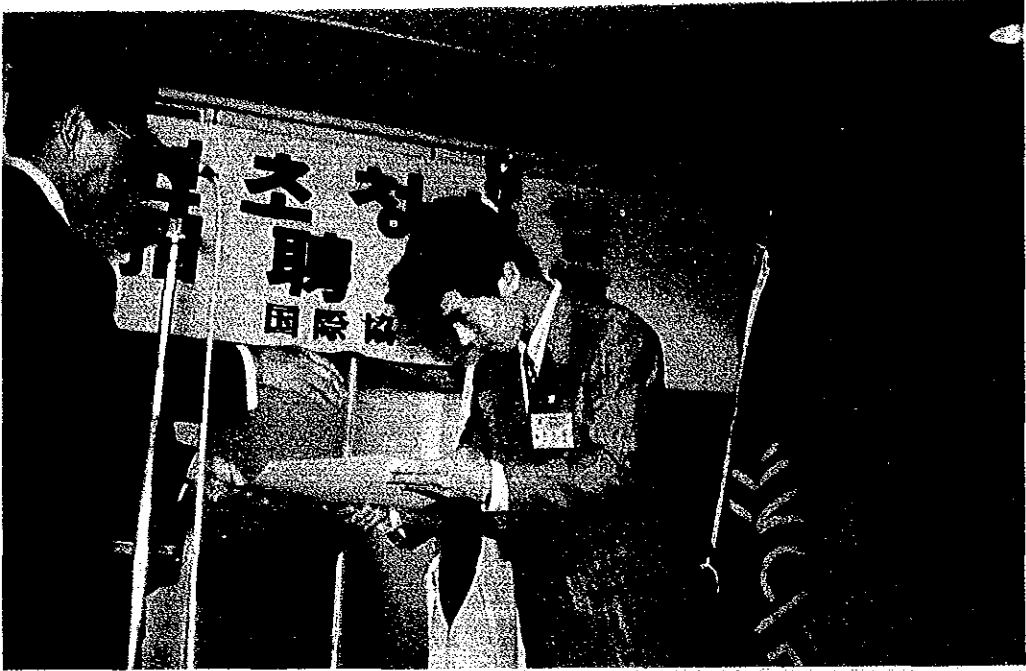
熱演!! 「韓国版ロミオとジュリエット」  
열연!! 한국판 로미오와 줄리엣



「また会う日まで、さようなら」  
「또, 만날때까지 안녕히 계십시오」

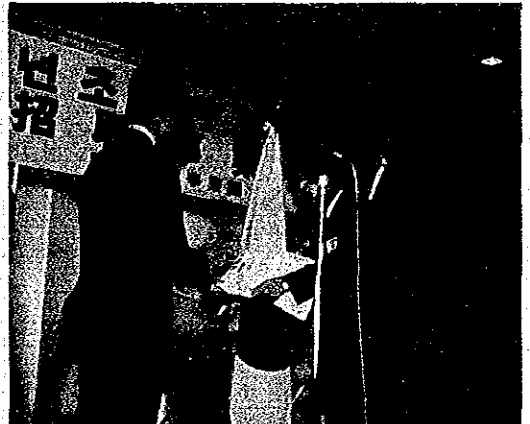
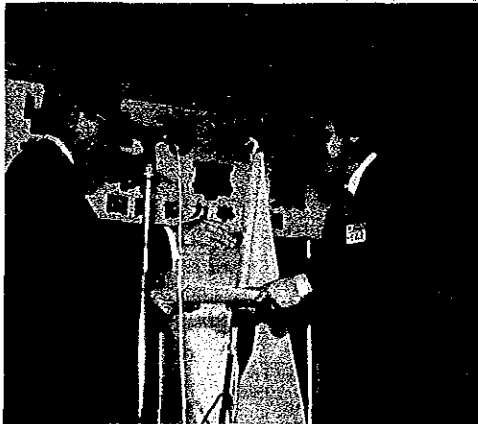


「またいつかきつと会えるよね」  
「또, 언젠가 꼭 만날 수 있겠지요?」



国際協力事業団遠藤理事より  
各グループ団長に参加証が授与される。

국제협력사업단 遠藤이사부터  
각 그룹 반장에게 참가증 수여



# 韓国青年招へい事業



## 序

「韓国青年招へい事業」は、1987年より5カ年計画で開始され、すでに398名の青年を招へいし、両国の高い評価を得ております。

今年度は第4回目を迎え、勤労青年、学生、教員および青年指導者の4グループ100名を受け入れて無事終了することができました。参加青年とわが国青年との友情のきずなは、青年の帰国後も文通等によって深められ、日本青年が帰国青年を訪ねるなどの動きも活発化しつつあると聞き及び、本計画がわが国と韓国との友好・親善の一端を担っていることをうれしく思っております。

本報告書は、招へい青年の代表、合宿セミナーに参加した日本青年およびホームステイを引き受けていただいた全国の家庭の皆様から寄せられた感想文を中心に、招へい青年の1カ月の滞在記録をとりまとめたものです。本事業の実施に当たっては、感想文を紹介させていただいた方々を含め、多数の方々のご協力をいただきました。そうした方々にとって本報告書が思い出の一助となり、また参加者の体験をより多くの方々に共有していただくことができれば幸いです。

終わりに、本計画の実施に温かいご理解とご協力をお寄せ下さいました関係者の皆様にあらためてお礼申し上げますとともに、「韓国青年招へい事業」が今後ますます有意義な交流プログラムとなりますよう、引き続きご支援のほどお願い申し上げます。

平成3年3月

国際協力事業団  
研修事業部  
部長 諏訪 龍





# 目 次

## 序

### 1. 韓国青年招へい事業

(1) 事業の概要 ..... 7

(2) 実施協力団体と実施県 ..... 9

2. 招へい青年の印象 ..... 11

3. 合宿セミナー参加日本青年の声 ..... 20

4. ホストファミリーの思い出 ..... 27

## <実績資料>

1. 韓国窓口機関（現地プログラム実施機関） ..... 30

2. 現地プログラム実施日程 ..... 30

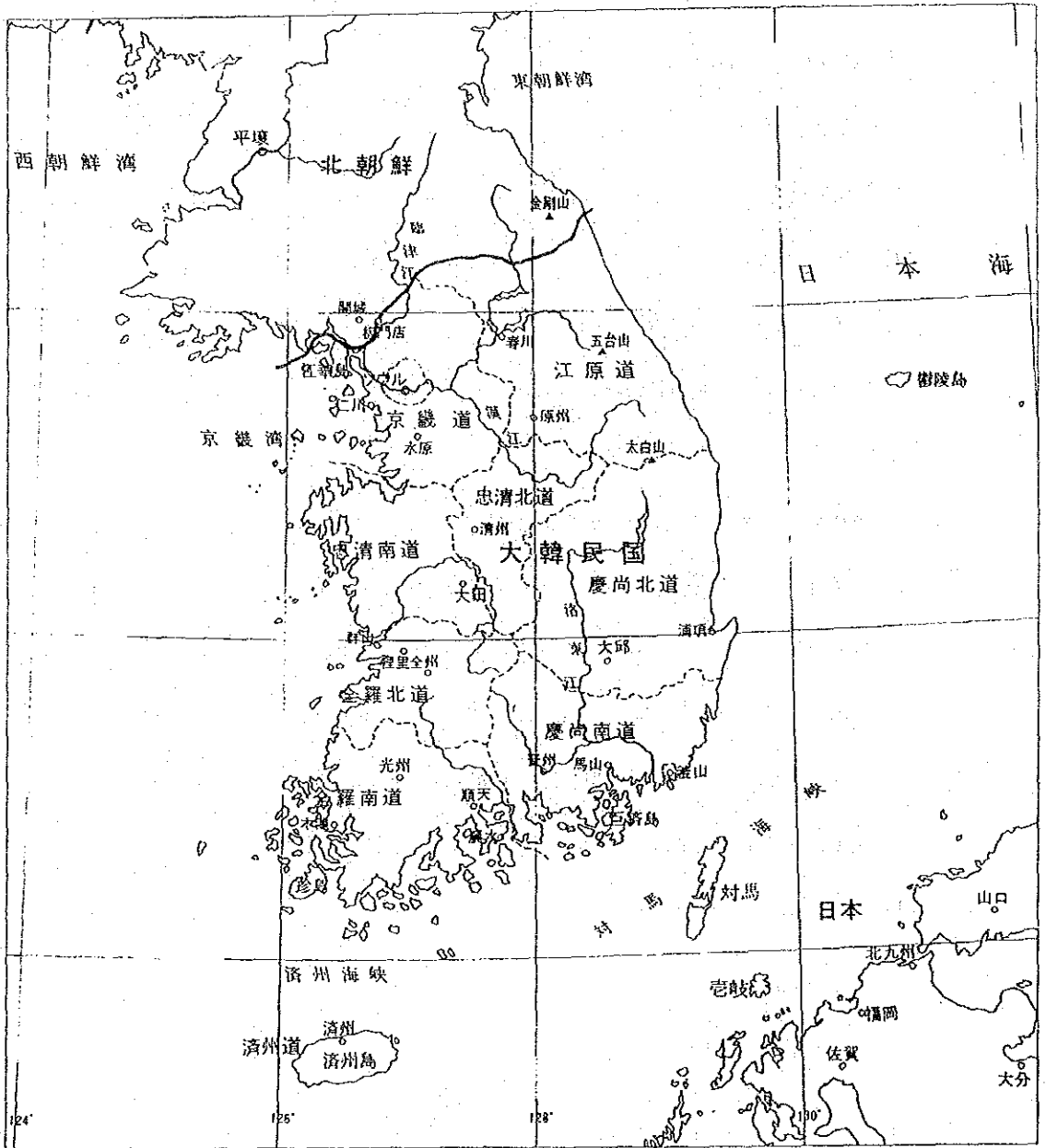
3. 実施日程 ..... 31

4. 韓国青年招へい実績一覧 ..... 35

5. 平成2年度青年招へい事業受け入れ実績一覧 ..... 36

6. 青年招へい事業実施協力団体等一覧 ..... 37

<韓国青年名簿> ..... 77



# 1. 韓国青年招へい事業

## (1) 事業の概要

### 1) 事業の目的

21世紀に向けて、日本と韓国との友好と協力の関係をより強固かつ実りあるものとするため、未来の国造りを担う韓国の青年を我国に招へいし、日本の同世代の青年との交流を通じ、相互理解を深め、真の友情と信頼を培うことを目的とする。

### 2) 実施方法

#### ①招へい人数

平成2年度は、100名の青年を同時期に受け入れる。

#### ②招へい対象者

下記分野における指導的立場にある18～35歳前後の青年。

(各グループのリーダー、サブリーダーは除く)

招 へ い 対 象 者	人 数
(i) 学 生	30名
(ii) 教 員	20名
(iii) 勤労青年	30名
(iv) 青年指導者	20名

#### ③招へい期間及び時期

招へい期間は7月10日～8月9日までの1カ月とし、出発前、数日間の現地プログラムを実施する。

### 3) プログラム概要

(数日間)	現 地 プ ロ グ ラ ム	現地講師による日本についての講義 経済技術協力の現場及び日系企業の見学 日本語の日常会話の学習 渡航に係わる説明	
来日	共 通 プ ロ グ ラ ム	日本の全体像について、正確な理解を促進するための講義及び施設見学	
(31日間)	分 野 別 プ ロ グ ラ ム	都内分野別プログラム	各分野の全体像について、正確な理解を促進するための講義及び施設見学
		合宿セミナープログラム	日本の同世代同分野の青年と寝食を共にする、意見交換、交流の場
		地方分野別プログラム	地方における関連施設の見学、地方青年との討論、体験、交流等のプログラムの展開
		ホームステイプログラム	日本の家庭生活の体験
		見 学 旅 行	広島、京都等歴史的都市の見学
帰国	評 価 プ ロ グ ラ ム	滞日成果について意見交換	
	ア フ タ ー ケ ア	事業効果を持続するための各種の施策	

### 4) 受け入れ体制

本計画を円滑に実施するため次の2委員会を設置する。

#### ①関係省庁調整連絡会議

(i) 任務：本計画の実施及び運営に係わる基本的事項につき協議。

(ii) 構成メンバー：

外務省経済協力局技術協力課

アジア局地域政策課

大臣官房文化交流部文化第二課

総務庁青少年対策本部

文部省学術国際局国際企画課教育文化交流室

農林水産省経済局国際部国際協力課

労働省大臣官房国際労働課

自治省大臣官房企画室

国際協力事業団

#### ②実行連絡調整委員会

(i) 任務：実行計画の運営、分野別プログラムの実施及び各プログラム間の連携につき協議し、プログラム実施上の問題につき、国際協力事業団に対し助言。

(ii) 構成メンバー：関係省庁より推薦された民間の実施協力団体。

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| (財)青少年育成国民会議     | (財)国際交流サービス協会    |
| (財)中央青少年団体連絡協議会  | (財)青年海外協力協会      |
| (財)世界青少年交流協会     | 日本青年団協議会         |
| (財)日本国際生活体験協会    | (財)日本ユネスコ協会連盟    |
| (財)全国農村青少年教育振興会  | (財)日本ユース・ホステル協会  |
| (財)日本経済青年協議会     | (財)日本友愛青年協会      |
| (財)勤労厚生協会        | (財)国際協力サービス・センター |
| (財)ユースワーカー能力開発協会 |                  |

### 5) 実施運営分担

	プログラム 実施・監理	プログラム運営		食事・宿舎の 手配
		連絡・調整	運営	
現 地 域 プ ロ グ ラ ム	国際協力事業団	国際協力事業団 (国際協力 サービス・センター)	各国実施機関 (在韩国日本国 大使館)	各国実施機関 (在韩国日本国 大使館)
共 通 プ ロ グ ラ ム (都 内)		国際協力事業団 国際協力 サービス・センター	国際協力 サービス・センター	国際協力 サービス・センター
都 内 分 野 別 プ ロ グ ラ ム (都 内)		実施協力団体	実施協力団体	実施協力団体
合 宿 セ ミ ナ ー プ ロ グ ラ ム				
地 方 分 野 別 プ ロ グ ラ ム (ホームステイを含む)		実施協力団体 地方協力団体 (国際協力事業団 国内支部)	地方協力団体 (国際協力事業団 国内支部)	地方協力団体
見 学 旅 行 (広島、京都等)		実施協力団体	実施協力団体	実施協力団体
評 価 プ ロ グ ラ ム (都 内)		国際協力事業団	国際協力 サービス・センター	国際協力 サービス・センター

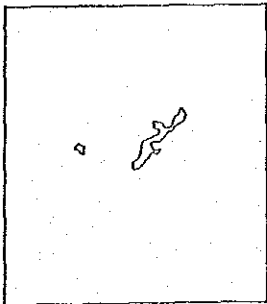
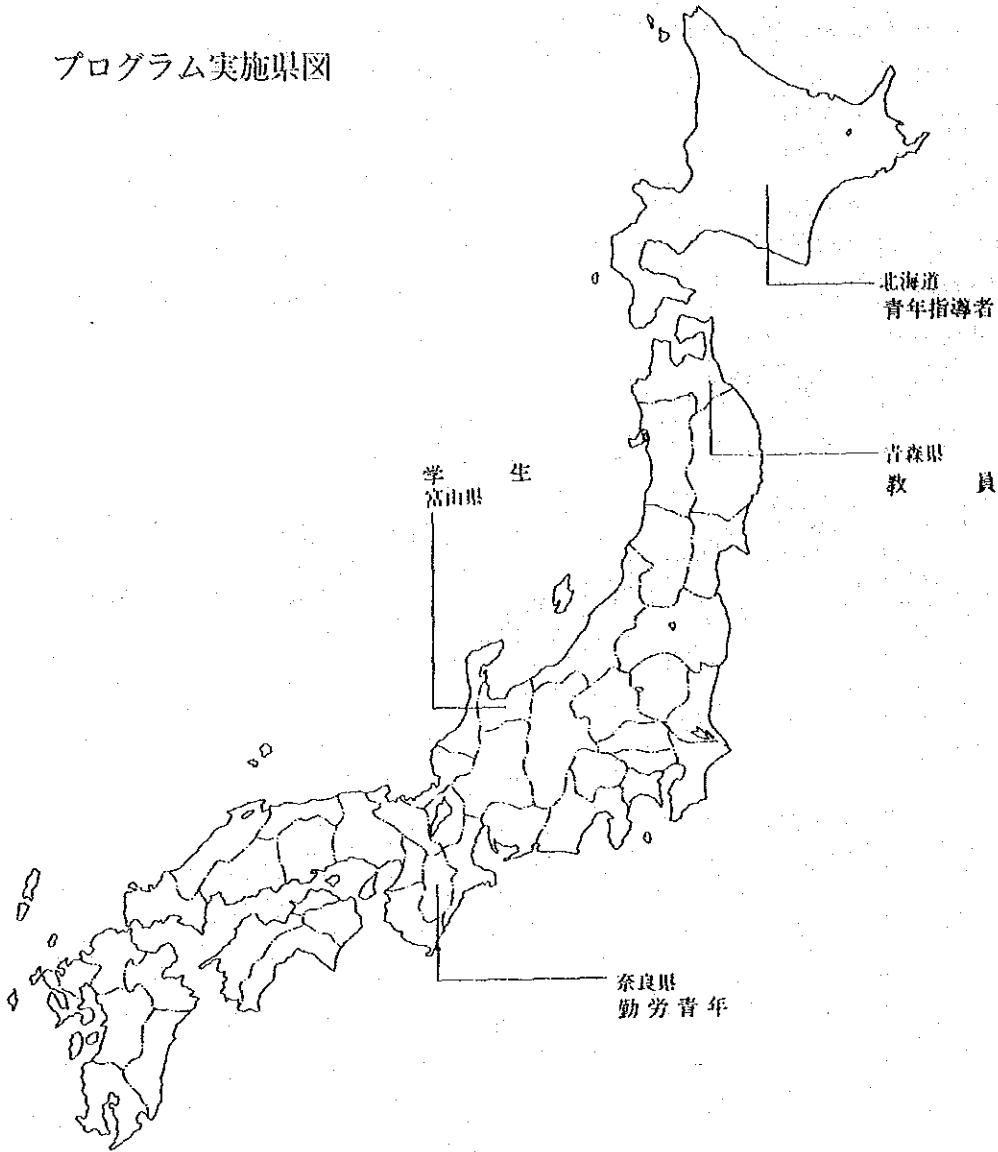
(注) 地方分野別プログラムは、地方公共団体の指導と協力を得て実施する。

### (2) 実施協力団体と実施県

分野名	人数	実施協力団体	実施県
学 生	31	世界青少年交流協会	富 山
教 員	21	国際交流サービス協会	青 森
勤労青年	31	勤 労 厚 生 協 会	奈 良
青年指導者	17	中央青少年団体連絡協議会	北海道

※共通プログラムについては、国際協力サービス・センターが全グループに対して実施した。

# プログラム実施県図



## 2. 招へい青年の印象

### 日本訪問を終えつつ



金 恩敬  
学生グループ

地理的に近いめだろう  
か？ 特別遠っているという  
印象を与えない日本という国

に、興奮にときめく心で到着した日が、今でも目に鮮やかだ。なのにもう1カ月の日程を終え、出国準備をしなくてはならないと思うと、一抹の寂しさを覚える。初めてこのような機会に参加できるとわかったときの胸の高鳴り、単純な観光でなく研修の目的を持って参加するというに、私はこの1カ月で何を、どのくらい学んで帰れるかという不安を抱いて日本にきた。そして今、自分なりの評価を出すときが来た。

1カ月の日本訪問は共通プログラム、合宿・都内分野、地方分野別、見学プログラムと大きく4つに分けて実施された。その中でも若者同士の出会いである合宿セミナーでは両国の若者たちの間の主な関心事について討論が行われ、また、文化交流会を通じ、お互いの伝統文化を紹介し合うこともできた。

すべての出会いが各々に大事な意味を持っているが、今回の日韓学生間の出会いは、より大きな意味があったと思う。その意味とは、まず第一にお互いに知らない点を紹介することにより、お互い、よく理解し合う契機となった点、第二に個人的次元で、お互い理解、友情を強めることにより国家次元での協力の足がかりをつくったという点である。

本当の意味での同僚者となるためには私たちの

前に立ちただかる心の壁を崩すのが一番重要なことである。過去の痛切な歴史のために堅固に積まれた壁を、少しずつ切りくずす作業をくり返すならば、いつかはその心の壁は必ず壊されると確信したい。

すべてのプログラムの中で誰しもが、程度の差こそあれ不安を抱かずにはいられなかったホームステイ。コーディネーターの方がホームステイに行く前と帰って来たときでは、気持ちが一変違いますよと慰めてくれても、不安にふるえる心を抑えることはできなかった。しかし今、振り返って見るに、知らないことに対する興奮の度合いが大きければ大きいほど、より大きな結果を得るのではないかと考えるようになった。

言葉は通じなかったが心は深い絆で結ばれ、日本の家庭の生活様式と余暇等を体験するよい機会となった。そして立山連峰の壮大な雄姿、大阪の「花と緑の博覧会」の華やかさは、けっして忘れることができないだろう。

今、私たちは自分たち本来の生活に戻ろうとしているが、私たちは心の中に1カ月の感動と新しい視野を持って帰るだろう。そして、日本は、日本人はこうこうであると家族や友人たちに話すつもりだ。

そしてこのような関係が次の世代にも引き継がれていくなれば、心の中の沈殿物のようなわだかまりの感情が消える日も遠からず来るであろう。

私たちは若い。若者はいくらでも障害を越える力があると固く信じながら、このような素晴らしい機会を与えてくださったJICAそして関係者の皆様に感謝の意をささげたい。

## 「21世紀のための友情計画」を終えて

鄭 泰南

学生グループ



さくわつ  
炸裂する夏の太陽のごとく  
熱い若さを持って、社会・文  
化等すべての面において遠う

国家を理解するために訪日し、見知らぬ異国の地を1カ月間経験しながらも、いつも目に見えぬ心の豊かさを感じることができた。まず、「21世紀のための友情計画」を企画し、私たちを招へいして下さった関係者の皆様方にお礼を申し上げたい。

今まで長い間、偏見と先入観にとらわれて判断してきた日本での生活は、私にとって初めは大変努力のいる難しいことのように思われた。その理由は、言葉の違いからくる意思伝達の難しさと生活環境、文化背景の相違からくる不安のためである。そして、見過ごすことのできない事実として、両国国民すべてが心の中の見えない障害に自ら縛られているという愚かさが、ますます私を不安にさせた。

しかし、温かく客として受け入れてくれるすべての人々の親切さと、手厚いもてなしに、そのような心配をした自分を今更のように恥ずかしく感じた。そしてわれわれすべてが真実でない嘘の仮面を、なぜ、はずせずにいたのかと心が重くなった。

日本滞在中体験したことの第一は、現在の日本を巨大な先進国につくった経済力を肌で感じられたということだ。街を歩きながら、出会った人と対話をしながら、そして工場を見学しながら感じたことは、多くの人が自分が受け持った仕事を徹底して行い、その分野に関しては自分が世界一である。よしんば、そうでなくとも世界一となり得る、という強い信念を持って邁進しているということだった。そのようなひとりひとりの考え方が

ら、たゆまぬ思考と努力のみが発展への正道であると悟った。また、努力した分だけその代価を望むという社会風潮は、真の意味での職業意識の到着点と思われた。

そして日本人個人々人から受けた印象は、自国民だけでなく異邦人に対しても大変親切ということだ。ひとりひとりの顔には豊かなほほ笑みがあふれ、きめ細かい心配りは、まさに感銘を受けたとさえいえる。そして3泊4日のホームステイを通じて感じたことであるが、初めて会った客としてではなく、まるで長い間厚い情を分かち合ったとても親しい友達か親戚のように、温かく迎え、世話をしてくれた。それは、いつまでも忘れられない心に残る日々となった。

けっしてぜいたくでなく、かといって貧しいわけではない庶民の家庭での生活は、日本の家族、文化を正しく理解する契機となった。お互い理解し理解させようという努力の中で芽ばえた美しい友情は、永遠の出会いとして記憶されるべき経験であった。

互いの価値観と社会、文化の相違点を正しく認識するために準備された学生合宿セミナーの場は、若者であるがゆえに、より未来志向的であった。感情よりも理解しようという立場で、相手国のすべての面をあるがままに討論し、それを通じ友情の輪を広げた。来たるべき21世紀は皆ともに前進しなくてはならないという思いを、固い握手を交わしながら深く心に刻み込んだ。

誰しもが自国の文化を中心に考え判断するために、他文化を排斥する誤謬ごごうを犯しやすいというのが一般的な現象である。しかし、今回日本の現代の映画、伝統劇である歌舞伎、そして各種民俗・歴史資料館を見学することにより国家の成立と発展過程そして現代に至るまで伝えられている習慣を一目で理解できる機会を持つことができた。そして、文化の違いはどのような場合においても、主と従の関係でなく相対性を認めて判断しなくては



ならないという平凡な真理を、今更ながらに痛感したのであった。

時間がたてばたつほど、より強く情がわいてくるのは、利害関係が異なる一国家を正しく理解し、お互い手を取り合って邁進すべき同業者であることを認識したからである。

今回の訪日を契機に、未来に対して大きくふくらんだ抱負を胸いっぱい抱き、より多くのものを見聞きし感じることができたことに、大きな意義を見いだす。そして、今回の出会いを通じ、永遠に絶えることのない友情で未来に向かって、ともに歩むことを願って止まない。

また、このような国際交流の輪が広がり、より多くの人々が参加し国際人として成長できる機会が与えられるならば、それは素晴らしい未来を建設するのに、大きな役割を果たすであろう。

最後に、日本滞在中、初めから終わりまで、物心両面においてお世話になったすべての方々に、心より感謝し、日韓両国の友好促進と貴事業団の限りない発展を祈りつつ、この小文を終えたいと思う。

## 日程を終えて



辛 靖

学生グループ

よく日本を指して“近くて遠い”といわれるように、両国間は地理的近さにもかかわらず、実際には各々の利害関係と立場の違いから、あまり望ましくない様相を呈しているのは否めない事実である。したがって、未来の友好協力関係維持のための実際的な努力の一環として、このような事業が行われているということはお互いを理解し両国の明るい未来を作っていくのによい足がかりとなるという点で、大変素晴らしいことだと思う。

日程は4段階に分けて実施された。まず、共通プログラムとして日本の歴史と産業経済、両国関係史、社会文化および日本語学習等、全般的な理解のためのプログラムが準備されていた。内容が多様で概略を理解する助けとなり、その後の日程に対する期待と興味をかきたてるのに十分な役割を果たした。講義を聴くことにより、日本の立場と視点を多少なりともわかることができた。また、歴史民俗博物館を見学し、歴史に対する関心度や史料の管理状態等をうかがい知ることができた。特に、講義と産業施設見学を通じて見た多くの投資と高度の技術水準は印象的であった。

都内分野別プログラムでは大学および下町風俗資料館等の見学、歌舞伎鑑賞、そして何よりも大事な日本の大学生たちとの討論が3泊4日で実施された。大学の訪問時には、学生たちのための多くの福祉施設と設備の水準の高さを見て、うらやましく感じた。また、日本の伝統演劇である歌舞伎の独特な味わいが印象的であった。そして日本の学生と直接膝を付き合わせて、感じ方考え方を話し合ったことは、たくさんの期待と興奮をもたらした。討論は真剣に話し合われ、次の時代を担う若い世代として、より深く理解し合うよい機会となった。両国の未来の可能性を見ることができ、大変手応えのある有意義なプログラムであったと思う。

地方分野別プログラムにおいては富山県庁を訪問し、自治体が独自のビジョンを提示、推進している姿を見ることができた。また、県内大学の特徴ある様子と運営方針もとても印象的であった。胸をときめかせた3泊4日のホームステイは、普通の家庭の生活の中に入り、ともに感じ生活し、日本の生活習慣をよりよく理解することができた。まるで本当の家族のように扱ってくれたホームステイ家族の方々の親切、厚い情、そして多種多様のプログラムを準備してくれたプログラム関係者の皆様方のきめ細かい配慮等は、いつまでも

忘れられない思い出となるであろう。

見学旅行プログラムでの広島原爆資料館見学では、人類を破滅に導く核戦争に対する脅威を、もう一度新たにさせられた。また、大阪の「花と緑の博覧会」では世界的なお祭りの趣を味わうことができた。

プログラムにもう少し私たちの意見が反映されればもっとよかったのではないかと、という心残りも、多少忙しい思いもしたが、このような交流が少しずつ両国間の友好と協力の明るい未来を開くいしづえになると信じて疑わない。多くのプログラムを誠実に、かつ、ほぼ完璧に推進してきた関係者の皆様方に感謝したい。今回の日本訪問を通じて直接体験し感じながら、新しいことをたくさん学び、自分の狭い視野を反省させられた。本プログラムに参加した人間として、国際化時代の一員として、両国間、ひいては世界の友好協力に役に立ちたい。そして何よりも祖国の発展にもその一翼を担いたいと思う。

## 私を成長させてくれた日本訪問



金 舜英  
教員グループ

日本！最も近くにありながら、最も遠い国。

幼いころは、無条件に敵国として、大人になってからは、恐ろしい国、常に油断せず、牽制せねばならぬ民族、しかし、心の片隅では、いつも知りたいという好奇心を起こさせていた日本に派遣……。それも、韓国の青年代表団として。

興奮と不安が半々の状態で、最善を尽くして、多くのものを見、学び、感じとって帰ってこようと心に誓い、玄海灘を渡り、1カ月の予定の日本での生活が始まった。

東京での10日余りの共通プログラムを通じ、日

本の歴史・文化・経済を学ぶうち、日本が私にとって大きな城として迫ってくるように感じられた。街のたたずまいからも、われわれと違いない彼らの顔からも、外国という違和感が感じられず、あまりにも近く感じられ、不安になるほどだった。それは、まだ私の心の中に強く根を下ろしている。われわれの先祖の間違った歴史がつくり出した、どうしようもない韓日のしこりのためであろう。

しかし、緻密に計画されたプログラムは、非常に有益であり興味深く、私の日本を知ろうとする好奇心の皮を1枚、2枚とむきはじめた。

7月18日。ねふた祭りの準備で熱気がある青森県に着いた。われわれ全員が心配と不安を最も抱きながら、一番大きな期待を持っていたホームステイ。

それこそ来日前わずか1カ月ほど、夜遅く日本語学院に通い身につけた、やっとの日本語力と、韓日辞典を頼みに度胸をきめて行った。しかし、一晚過ぎてみて驚いた。私自信の変化のためだった。ホームステイということにあまりにも緊張していたせい、もしくは、ホストの高橋さんとの夜遅くまで交わした遠慮のない対話のおかげか、いつもの宿舎であるホテルより手狭な慣れないこの家が、こんなにも私の家のように平安と居心地のよさを感じさせてくれるというのは？

そして、疎外感を全然感じさせない高橋さんのご家族の配慮のおかげで、弘前の養護学校訪問、ねふたの里の見学、八幡平・十和田国立公園の観光等、われわれ一行の中で誰よりも内容のある素晴らしいホームステイであったであろうと思う。

特に2日間とも夜中の3時まで家族皆で教えたり、教えられたりしたアリランの歌と踊り、日本人のヨーロッパ志向やアメリカ志向の誤りを指摘し、韓日歴史の過ちを指摘しつつ「われわれは同じアジア人であることを幾度も強調し、アジアのためにともに一生懸命、努力しよう」という言葉

を通し、私はあれほどかたくなに拒んでいた日本を受け入れるしかなくなった。

青森の“さよならパーティー”が終わり、別れるとき、おふたりの目に光っていた涙を私は一生忘れることはできないだろう。日本で出会った素晴らしい人としてのおふたりを！

8月8日。成田から私が無事帰国するまで見守っていてあげるよと言ったおふたりの約束だけではなく、日本にいる間、私が出会ったすべての方々、観光バスのガイドさん、そして、道を尋ねた見知らぬ人にまで、ひとりひとりすべてが私にとって日本の民間外交官だったのだ。

私は、今日、日本の世界的な経済大国としての大きな発展は、まさに自分自身の位置で、自分にまかせられた仕事に最善を尽くす彼ら民間外交官たちのおかげだと確信する。

多くの方々のご苦労とお心づかいのおかげで、1カ月の日程を無事に、そして非常に有益に学び終え、訪日したてのころより、はるかに豊かになり、余裕のできた私の日本に対する心をのぞきこんでみる。

何が私をしてこれまで日本をあのように憎ませていたのか？ このように情が厚く温かく、誠実なわれわれの隣人たち。そして、帰って伝えよう、私が見た日本のすべてを。過ぎ去った過去に縛られ、憎悪から脱け出せず、真の大いなるものをつかみえなかった偏狭さから、今や、勇敢に脱出してみせよう。そして、もう少し、成長した目と姿で21世紀に向かい、力強く前進する日本と肩を並べて立とう。「われわれは同じアジア人。アジアのためにともに一生懸命努力しよう」という高橋さんの素晴らしい言葉を胸の奥深く刻みつつ……。

最後に、われわれの日本訪問のためご尽力くださったJICAの関係機関すべての方と、日本がわかるように最善を尽くしてご苦労くださったコーディネーターの森下さんと榎本さんに心から感謝の言葉を伝えたい。

## 近くて近い国になろう



姜 寛熙  
教員グループ

近くて遠い異国の地、日本。はじめて来る日本ゆえに、多くのものを見、学び、この貴重な経験を通じ、生徒たちに日本人の長所を教えようというのが、私個人のひそかな旅行目的だった。

金浦空港を出発し、美しい山河に恵まれた韓半島を後にし、玄海灘を越え、2時間ほどで成田空港に到着した。やはり距離的には近い国には違いなかった。

成田空港から東京のホテルメトロポリタンに移動する際、夜遅くまで明かりがついているビルの事務所が見えた。私の第一印象は、「日本人は一生懸命生きているなあ」ということだった。整備のいきとどいた道路を走っているとき、韓国の三星電子と真露会社の広告宣伝塔を見たとき、胸にこみあげてくるものがあった。

最初に、共通プログラムでは有名な教授の講義を通じ、日本の経済、文化、歴史等を学んだ。断片的ではあるが理解に役立ち、韓国と似ている点が多いことがわかった。

東京から青森に移動するとき、車窓から見える風景は、幼いころの故郷に帰るような懐かしさを感じるほど、親近感を持たせてくれた。

日本青年との交流会では、お互いひとつになって興にのり、歌や踊りをともにするなど、親兄弟と同じような感じがした。

青森県と北海道をつなぐ総53.9キロの青函トンネルを完成させるために、構想から開通まで65年という長期にわたる計画の緻密さと、静かな意志と根気を持った国民性を学び、このような国民性ゆえに第2次世界大戦の敗戦国家が、今日の世界経済の強大国になったということがわかった。

日本の教員との合宿セミナーでは、両国の教育に対し、真面目でひたむきな討論をし、現在の教育の問題点を解決するために激論をたたかわせ、日本の教育は実用主義を追求しているようだった。

また、世界の共通語が英語であるように、スポーツを通じた交流の力は大きいということをあらためて実感した。競技で汗びっしょりになった体をぶつけ合い、楽しんでいる姿はひとつに解けあっていた。

25日を過ぎ、長い旅程に体は疲れていたが、われわれ全員は広島に移動した。

45年前の原爆被害を受けた“建物”を除き、高くそびえ立つビルディングがたくさんあった。平和公園を過ぎ、韓国人原爆犠牲者慰霊碑に到着した瞬間、錯綜した心情をおさえることができなかった。強制徴用され、異国の地で原爆により犠牲になった彼らは、死んでからも相應の待遇も受けられず、公園の外に慰霊碑があるということは、どんな弁解の余地もないと思う。

このようなことは、これまでわれわれ訪問団一行を温かく迎え、親切にしてくださったいろいろな方々の功績によりたてられた塔が、一夜のうちに崩れさったような感じを受けた。

しかしわれわれは信じたい。日本が多くのわれわれ訪問団を招へいしながらも、よくない感情がわれわれの心の中にいつまでも残存するような愚かなことはしないということ。

われわれが望むことは、人間はどこでも誰にでも平等に扱われなければならないという、最も基本的であり、根本的な問題だ。それ故に日本国内に居住する在日韓国人や慰霊碑が、日本人と同じ待遇を受けたとき、本事業はよい結果が得られ、より一層、相互理解が促進され、近くて遠い国から近くて近い国になることができるだろう。

最後にわれわれ訪問団一行のためにこまやかな部分までご配慮くださった関係者の皆様に感謝を

捧げ、貴国の限りないご発展を神に祈ります。

## 日本訪問を終えて



伊 春淑

勤労青年グループ

金浦空港を後にしたJAL 954便は、民間外交使節団を乗せて、青空のもと、成田空港に降り立った。

高度経済成長を成し遂げた日本と日本人に対する期待感で、私の日本滞在が始まったのである。

奈良県での講義の中で、日本人の性質について、日本人は70パーセントが不満でも、30パーセント満足すれば、その30パーセントの満足を表にあらわす国民であるという話を聞き、大変驚いてしまった。そして、経済大国となりえた原動力は、実はここにあったのではないだろうかと考えた。

数多くのプログラムの中でも、特に、真下均さん宅でのホームステイが最も有意義であり、楽しい一時ではなかったかと思う。韓国語、英語、日本語や体全体を使ってコミュニケーションを図ったが、遠い日本という国ではなく、近所のおばさんの家に遊びに来たような感じがして、長く思い出に残りそうである。

また、今回の交流で感じたことの中で、ほとんどの日本人が容易に自分の心を表さないということを知った。そして、私はこのような日本人に対する理解の幅を広げることの必要性を感じた。また、「出合いの場」を通して、同じ世代の若者としての葛藤と悩みを取り除き、世界に向かってはばたけるよう、お互いに努力しなければならないということに私は強い使命感を感じた。

韓国文化（三国文化）を古代から取り入れてきた奈良県では、その文化遺産の華やかさに、私たちは韓国人としての誇りを十分に感じる事ができた。また、富士箱根ランドではたくさんの花火

を上げたが、その花火は私たちの心を開き、韓日両国の若者は燃えあがる最後の花火に友情を託し、私たちの友情がこの花火のように燃えあがっていくことを確信した。

終わりに、日本政府、JICA、勤労厚生協会、奈良県世界青年友の会、コーディネーター、そして日本で出会った友人たち、また、1カ月間生活をともした仲間たちの健康を祈りながら感謝の言葉を伝えたい。

神の恵みと栄光がありますように……。

1990年8月

## 日本訪問感想文



兪 永徳

勤労青年グループ

1カ月という長くはない日本での滞在に、私はもうすでに故国への郷愁を感じており、それは、私のひとつでも多く見て体験しておこうという気持ちにそぐわないものであった。

帰国を目前にした今、なぜか名残惜しく寂しい気持ちを隠すことができない。

今、ふり返ってみると、心踊る期待と若干の不安があった。思ったよりも近い日本であった。先端産業見学、日本語体験、関係機関訪問、合宿セミナー、そしてホームステイ等を通して多くを学び、私は私なりの価値観で評価することができた。

日本という国は、知っていたとおり富強で秩序の国であった。日本人は勤勉、率直で忍耐強い人々であった。しかしながら、その国民生活は、その経済の豊かさに比べ、相対的に質素な生活を送っていたように思われる。その中でも日本人は誇りと自負心を持ち、自分の責任を果たし、伝統文化継承発展にも力を入れていた。これは本当にうらやましい姿であった。それに比べて、韓国はどれほどの華麗な文化と伝統を継承しているだろう

か。特に、われわれ若い世代は、享楽と流行により多くの時間を費やしてきた。帰国したら、ぜひ、制度的に伝統芸術の開発と普及発展に力を尽くしたいと思う。

ところで、ここでひとつ、礼儀に反するかもしれないが、不満を言わせてもらいたい。

広島平和記念公園を訪問した際、韓国人慰霊碑が公園の外にあるのを見たとき、私は悲しみと怒りを禁じえなかった。近々、公園内に移すという話は聞いて知ってはいるのだが……。生きている者は、犠牲となって亡くなった人々の前で、祈りを捧げることさえはばかれるような生を営んではいないだろうか。この憤懣<sup>いんげん</sup>やるかたない犠牲の加害者は、同じ人類ではあるのだが、このような偏狭のもとに行われている45周年記念行事の準備は、いったい、何のための準備であるのか。そして、平和と反核の声は、いったい誰のための叫びなのか。アイロニーを感じずにはいられない。

今回の訪問は、われわれひとりひとりにとってかけがえのないほど貴重な経験であり、真の意味での愛国の道を考えさせるよい機会となった。目に見えない被害者意識で日本を嫌い、日本を知ることさえ拒んできた今までが、どれほどおろかなことであったかわかってきた。これからは私の周辺の人々に、日本への訪問を積極的に勧めたい。日本の実態を正確に知り、長所を取り入れ、自国の発展のきっかけとする民族的知恵が切実に要求されているときであると思う。

今回のプログラム運営にあたり、ご尽力くださったJICAの皆様と各協力団体の皆様、そしてコーディネーターの方々に感謝しながら、この感想文を終えたいと思う。

この文は記録者の考えだけを記したものであることを最後に付け加えておきたい。

## 感想文



張 海一

青年指導者グループ

今の私はまるで、1カ月間の休みが終わり、新学期を待っている学生の心情である。初めは、多くのことを見、考え、経験して帰ろうと思っていたのに、今、振り返ってみると、やり残したことがいっぱいあり、大変心残りである。

1カ月間でその国を見て、その国民の生活状況を理解しようとするのは、けっして容易なことではない。特に、日韓関係においてはなおさらそうだと思う。それは歴史の連続線上において考えなければわからないからだろうと思われる。1カ月がすぎた今、実感することは、今まで日本を動かしてきた原動力は、法を遵守し、勤勉で親切なサービス精神にあると思う。

もちろん、部分的には、若者に愛国心がないと心配する面もあるが、これは日本が現在あまりにも豊かであるためで、国家の危機に際しては違ってくると思う。ちょうどキューバ危機のときアメリカ国民が示した対応のしかたを日本人もとるであろうと確信する。

しかし、日韓関係で残念に思う点をあげるなら、それは日本人個人についてと言うより、日本人全体の韓国人に対する認識上の問題である。いまだに日本全体としては韓国に対して友人としての感情がないように思える。もちろん、若い世代にいたっては、だんだんよくなってはいるが……。

21世紀を迎えようとする今、望まれることは、すべてのことを断絶された歴史線上でみるのではなく、過去を踏まえただうえで現在を見、現在という土台の上に未来を展開させていくという姿勢だ。そのためには今回のようなプログラムの拡大とともに、韓国人の心の痛みを癒してもらいたいし、また、心を開いて、温かい友情を見せてほし

いと思う。

それが実現するとき、このプログラムもより大きな効果を得ることができ、それが未来のよい隣人関係のための土台になるだろうと思う。このようなプログラムが今後とも、より拡大、発展されることを願いつつも、今回のプログラムに、自分で見て、経験して、何かを感じることができると感動がもう少しなされていたらと、残念に思う。

これからはこんな心が集まって、国の世論として形成されることを信じると同時に、私が出会った日本人の姿勢が、日本人全体に広まっていくことを期待しながら、私たちが見た日本のよい面、素晴らしい面がそのまま韓国にも伝わることを望みながら、このプログラムを終えようと思う。

## 訪問記



金 希燦

青年指導者グループ

まず、私たち韓国青年代表団一行を招へいし、温かく迎えてくれた日本政府と関係機関、および協力団体、そしてホームステイ受け入れ家庭の皆様、全体日程を主管したJICAの方々、皆様に対して、心より感謝致します。

地球村という言葉がもうなんの抵抗もなく、自然に使われている今の世界で、近い国、日本を訪れて、多くのことを見て、聞いて、学べる機会はわれわれにとっては過ぎた感じがするほどである。両国間の歴史の中で、しこりとして残っている悲劇的片鱗を、21世紀の友情として昇華させようとする努力の過程に私たちが参加できたことは、参加青年みんなにとって、とても意味深い感想を与えたにちがいないと思う。われわれ皆、とても有意義で貴重なこの経験を、両国間だけの友好隣人の次元にとどまらず、世界に向けての友情の心の扉を開くきっかけにすることである。

今、1カ月の長くて短かった訪問の旅程を振り返ってみると、多くの日本人との記憶がよみがえってくる。日本の実態について、比較的疎か（そか）かった私たちに対して、日本を理解してもらおうと熱心に講義してくれた教授の方々、日本語をおもしろく教えてくれた先生方、合宿セミナーの分科会で出会った日本人たち、地方協力団体の皆さん、ホームステイ受け入れ家庭の家族の方、訪れた町で車ですれ違った人々、これらのすべての日本人たちの共通点があるなら、それは親切な行動と温かい心だと思う。お客を温かく迎えて、誠意を尽くす心性がまさに東洋の伝統の美德であるとするなら、この美德を守っている日本人に対して賛辞をおくりたい。また、まわりの環境を清潔にし、保存する姿は特に印象深かったし、よく整えられた公共施設と文化遺跡、そして博物館と展示館の遺産などは、本当にうらやましい限りだった。と同時に、このような公共施設に対する国家財政支援の莫大さが、日本の国力の大きさを物語っているようだった。

しかし、私たちは日本の良い面ばかり見たり、聞いたりしたわけではない。産業社会の高度化に伴って生じた家庭倫理の葛藤、そして、国民の個人中心主義的傾向の高まりによる社会的結束のゆるみについても、日本で出会った方たちとの率直

な対話を通じてよくわかった。教育的な次元での青少年たちの非行の増加、無目的性などについては一緒に悩み、討論した。伝統的な家庭においての女性の不満についても、たくさんのことを聞いた。このような社会的問題は韓国においても同じ現象が起きているので、たいへん参考になった。このような社会的問題解決のためにも、日韓両国の友好親善の発展はたいへん期待できることをあることを信じる。

一方、このプログラムの日程についての多くの資料準備と支援はよかったが、青年たち自身が見て聞いた日本での経験を、各自が消化できる日程の余裕がなかったのが、少し残念だったと思う。1カ月余りの外国での生活がもたらす心理的、肉体的、文化的ストレスを解消できるよう、特に、午前中の日程についてはもう少し余裕をもって組んでいたなら、1、2カ所多く見学するより、大きな効果があったにちがいないと思う。

最後に、両国間の友好隣人関係が一層発展することに声援をおくりながら、心の豊かな日本人が先進国家としての自信を友情の輪として広げてくれることを願う。

富士山の優雅な美しさが、親切な日本人の印象とともにわれわれの記憶に永遠に残ることだろう。

### 3. 合宿セミナー参加日本青年の声

#### 合宿セミナーに参加して

金山 友子  
学生

今回のセミナーを通して、多くのことを学び、考えることが多くあった。

私がこのセミナーに参加しようと思ったのは、私の中の“いわれなき在日韓国人、朝鮮人への偏見”の源を探ってみるということだった。ほかの参加者と比べ私の動機はかなり個人的なもので、セミナーとしての目的とも多少ずれていたのかもしれない。しかし、私個人としては、自分自身の内面の問題を解決せずに、大きな流れに乗ることなど、上すべりのような気もしたし、単に「できない」と感じていたのだ。

不十分であったが、準備をし実際韓国人学生とじかに接していく中で、今まで気づけなかった自分の内面を読むことができた。個人レベルでは“被害者—加害者”ではないのに、国レベルになると厳然としてある構図は実にショックであった。もしかすると、私が彼らに抱いていたいわれなき偏見は、加害者としての罪悪感が、開き直りの形で社会化されたものかもしれない。彼らから「正直言って日本のイメージは悪い」と言われたときの、あの居心地の悪さ、悲しさのようなものを、しっかり受けとめて、それを伴って進んでいかねばならない。

残念であったのは、準備が不十分でディスカッションも思うようにいかなかった点である。どの程度まで話してよいことか戸惑ってしまい、あたりさわりのない討論になってしまったのが多少の心残りである。

#### 合宿セミナーに参加して

山崎 瑞紀  
学生

今回、日韓学生合宿セミナーに参加して、韓国の学生は何を学び、どのようなことを感じたのだろうか。私個人に関していえば、このセミナーは大変意義深いものだった。ディスカッションIIにおいて失敗があったことは非常に残念であるが、その他のレクリエーションや語り合いの場などでも、彼らの考えを知ることができた。

特に印象深かったのは、彼らのモラル観だった。ガールフレンドと手をつなぎたくてもつなげない大学生は、日本にはほとんど(あるいはまったく)いないのではないか。また、帰りのバスの中で「マルサの女」のインモラルなシーンを驚いたように見ていた学生に対して、日本のモラルの低下を恥ずかしく思ったのは私だけではないだろう。

さらに、同じ受験戦争、競争社会の中で生活していても、彼らの間には儒教の影響によって“いじめ”の問題は生じていないのだという話には、私はショックさえ覚えた。彼らに指摘されなければ、実感しなかったろう日本の病んだ部分を、改めて知ったという気がする。

また、遊びの面に関していえば、山中湖は友情を育むのに最適の場所であり、とても楽しい夜を彼らと過ごすことができた。

率直に言って、私は彼らが好きだ。だからこそ彼らにも、私のこと、私たちのことを好きになってほしいと思う。私は彼らのすべてを理解したわけではないし、彼らも私たちのすべてを理解したわけではない。けれど理解したいと思うし、それ



は可能だと信じている。私たちの友情は始まったばかりで、まだまだこれからなのである。

## 韓国セミナーを終えて

橋本 たみ  
学 生

大学生生活は楽しい。テニスも友達関係もうまくいっている。勉強も何とかこなし、生活のテンポが決まってきた。しかし何かが違う。このままじゃつまらない、刺激がほしい。そう思っていたころ、セミナーのことを知った。日にちの都合上、韓国セミナーにした。そんな私なので、事前研修会やディスカッションの打ち合わせのたびに考えてしまった。自分の認識の甘さ、不勉強さ、また芸のなさ、語学力のなさ、そして消極的な面に気付き、自信をなくしてしまった。こんなに関心ある人が集まって、その中で自分を見つけ出していくのは大変だと思った。私はみんなのいいところを観察し、吸収していこうと思った。

セミナーは一段落した。参加してとてもよかった。一番よかったのは、自分を見つめ直せたこと……。合宿を終えて思い出すのは、みんなのことばかり。韓国語と英語と日本語が、頭の中でごちゃになる。

韓国の学生を、もっと時間をさいて東京を案内したり、もっと彼らといろいろな話をすればよかった。今考えると残念でしかたがない。

韓国と日本の関係が非常にむずかしいのは分かるが、これからは、韓国人と日本人という枠のある付き合いではなく、人間同士の付き合いができるようになるといい。

## セミナーに参加して

島岡 良衣  
学 生

韓国は近くて遠い国……、そんな気持ちが強かった。韓国に対して浅薄な知識しか持ち合わせていなかったし、実際、韓国人学生とどれほどのコミュニケーションができるのかと、とても不安だった。

セミナーでは、一番時間をかけたせいも、ディスカッションでの印象が最も強い。韓国側が、微妙な問題について、正面から論じようとする姿勢を見せたときには、少し尻込みをしたが、各々の考えを率直に議論したのがよかった。はじめは、互いに構えていたが、議論を重ねるにつれ、次第に壁が崩れていくのが感じられた。在日・サハリン韓国人問題について、天皇制について、外交問題について等、短い時間のなかで多くの議題を詰め込みすぎたきらいはあるが、議論の最後に、韓国人学生が、「今まで抜け切らなかった日本に対する憎悪と偏見が、たった3日間のセミナーでなくなった気がする」と感想をもらしたとき、心の底から感動がこみあげた。

その他の場面でも、ちょっとした習慣などから親近感を覚えることが多かった。かつてアメリカの学生たちと会議を通じて交流したことがあるが、彼らにはおよそ感じられなかった“情”を、韓国人学生のなかに感じることができ、同じ文化圏にいることを痛感した。

日本と韓国は、政治的・経済的に、手を取り合っていかなければならない必要性に迫られてはいるものの、両者間の感情的溝は依然として深い。こうした現状にあって、われわれの世代はこの溝を埋めていかなければならない責務を負っている。今回のセミナーに参加したことで、そうした責務を放棄してはならないことを改めて認識したとともに、その努力の積み重ねはいつかきっと実

を結ぶのだということを確認した。これからも自分自身機会を見つけ、日韓の相互理解のため努力していきたい。過去の歴史は消すことができないが、未来に刻む歴史はこれから築くものであるから。

---

## 合宿セミナーに参加して

蔵原 幸  
学生

このセミナー期間中のどれをとっても、とても楽しいものだったが、特に心に残ったことがふたつあった。ひとつは、文化交流会の際、韓国の女の子たちがチマチョゴリを着て歌ってくれたこと。私はチマチョゴリを見るのは初めてだったが、そのあまりの美しさ、気高さに胸が熱くなり、涙を抑えることができなかった。こんな素晴らしい韓国の文化を抹殺しようとした日帝時代の日本のことを思うと、恥ずかしさと同時に、くやしさがこみあげてきた。これまで日帝36年と聞いても、ピンと来るものがなかったが、彼女たちのチマチョゴリの美しさ、気高さが、私に日帝36年の愚かさを、何よりも教えてくれたと思う。

もうひとつは、楽しかったセミナーも終わり、芝パークホテルに着いたときのこと。ひとりひとりと握手をし、別れを惜しんだ。みんなの顔を見るたび、涙が出て止まらなかった。そして趙彰梨さんの前に来たとき、彼女も泣いていた。彼女とはディスカッションIで一緒だったのだが、彼女はそのとき、「日本は嫌だし、両国間にはまだ壁があると思う」と強い口調で言い、心を開いてはくれなかった。そんなことを思い出しながら、私は彼女に涙で声をつまらせながら聞いた。「いーちゃん、壁はまだあると思う?」。彼女が顔をくしゃくしゃにしながり返してきた答えは「No, No!!」。あとはふたり、もう何も言えず、きつく抱きあった。彼女に伝えたい気持ちはたくさんあったが、

涙で言葉にならず、ただ「カムサハムニダ」ばかり繰り返した。

このセミナーを通して、韓国のみんが日本を見る目も、日本のみんが韓国を見る目も、よい意味で変わったと思う。そして、こんな私でも少しではあるが力になれたことに感激している。私たちは、世界がこれからどう変わろうとも、変わることのない友情を得たと確信している。そしてこの友情は今、始まったばかりなのだ。このセミナーで学んだことを忘れずに、また新しい友情の種を世界にまいていきたいと思う。

---

## 合宿セミナーに参加して

村田 剛志  
学生

山中湖に行った。韓国の学生と議論し、酒を飲み、遊んだ。このこと自体が、相手の国を知るためのきっかけになってくれると思う。ディスカッションの内容はどうでもいいと言ったら言いすぎだが、直接韓国の学生と接したという事実のほうが、ずっと重要なことだと思う。

“言葉の壁”は確かにあった。英語も役に立たないときがあった。でもセミナーの終わりのほうでは、なんとか相手の意思を理解（あるいは誤解かもしれないが）できるようになったと思う。

反省点はふたつある。まず第一に、向こうがこちらのことを知りたがっているほど、こちらは向こうのことを知ろうとしなかったことである。韓国の学生が質問してきてから答え、そのあとで韓国のことについて逆にたずねる。そんなパターンが多かった。よく考えればこれは失礼なことである。まず知ろうとすることが最低限のマナーであると思う。

二番目は（一番目のものとも関連があるが）、韓国より日本のほうが進んでいるという意識が心のどこかにあって、それがなにかのはずみで口に出

ていたかもしれないということである。そもそも進んでいる、後れているという尺度自体疑ってかからなければいけないと思う。「よく知らないが、後れた国だ」という意識は非常に危険なものである。相手の国そのものを独自のものとして大切にしないでと思う。

セミナー全体としては本当に楽しかった。彼らが東京に帰って来たら会いたいし、手紙も書こうと思う。

最後になるが、このセミナーを支えてくれたスタッフの方々に心から感謝したい。



熱心な討論

## 合宿セミナー感想文

吉原 正道  
会社員

私自身、学生時代から今回のような合宿セミナー等に多く参加してきたが、今回のセミナーは、もっとも印象深いものになったと思う。以前より中国、韓国等の近隣諸国については興味があり、かなりの本を読んだと自負しているが、今回のセミナーではそれらの本を読むことによって生じた数々の疑問に対しての解答を得たということが、個人的には大きな財産になったと思う。

ひとりの人間が他国の文化、人を知る際には、自らが持つ常識に対し疑問を持つことを否定しては、他国のことを知ることはできない。読書によって得られる知識は、すべて自分自身の持つ常識が尺度となる。今回のように韓国の人と直接顔を会わせ、言葉を交わすことによって得られる彼らの日本観を、自分が直接感じることであれば、自らの常識の尺度を変化させることができれば、ものを見る目は自然に養われてくる。しかし、現状では、われわれにとってこの大切な感覚を養うチャンスは、非常に少ない。その点でJICAならびに私を推薦して下さった会社の人には感謝している。

さて、具体的に感じたことを列記してみたい。まず第一に、われわれと韓国の人たちは非常に似ているという点が挙げられる。これは、外見のもののみならず、内面的なものもある。基本的には、他人を敬い、家族を大切にする点である。しかし、この儒教の考えを基本としたものごとに対する倫理感については、韓国の人たちのほうが、われわれよりも数段強いものがあると思う。私自身の考えとしては、基本的な倫理的精神（目上者を敬う）も、一定のレベルを超えると、目上者を盲目的に信じることになり、本質的なものの捕え方が鈍くなっていくという副作用が発生してくるため、結果として権力に対する依存が強くなると感じた。

相違点としては、韓国の人たちのほうが、早く心を開いてくれるという印象を得た。日本人の場合は、相手に対する警戒が解けてから相手に対し心を開くという傾向にあると思う。たしかに、言葉の相互理解は皆無に等しいが、わずか3日という期間で、これほど親近感を覚えられたのは、彼らの素晴らしい特性によるものが大半であると思う。人間が持つさまざまな財産の中でもっとも重要なのは、心おきなく付き合える友人の“質×量”だと思う。その点において、韓国の人たちには見習う点が多い。

3日間のセミナーにおいてもっとも残念な点を

挙げれば、言葉が互いにほとんど理解できなかったという点に尽きる。英語が話せる人の場合は基本的疎通は図れるが、他の人は通訳の人がいないと表情によって相手の考えを憶測するのみになってしまう。何かを話したいのに言葉がわからず下を向いて手帳を開きあうという行為はやむをえないにしても、残念なことである。今後は、ぜひ韓国語の勉強をしたいと思う。

最後にこのプログラムについての意見を述べてみたい。まず、韓国の人たちのスケジュールをもう少し、柔軟な発想において決定すべきである。たしかに異国の地で、何か不自由な思いをさせてはならないという点は基本的なものであるが、30の人が来れば、30の目的を持っていると思う。1カ月のスケジュールのうち1週間は、それぞれの人が自由に動けるスケジュールにすればよいと思う。何か、不自由な思いをさせてはならないという考えは、日本人特有の過剰防衛意識だと思う。多少は不自由な思いをしても、自分の意思によってすべての行動を制御したほうが、満足感が得られるものだと思う。もし、自分が韓国に逆の立場で行くのなら、安全なバスや電車で全員一勢に行動するよりも、電車の切符を自分で買い、レンタカーを借りて、好きな所へ行き、食べたいものを食べてみたい。

最後に、このセミナーをこの3日で終わりだと考えるのではなく、プライベートまたはJICA等で韓国へ行く機会があれば、ぜひ参加したいと思う。

## 合宿セミナー感想文

岩崎 浩幸  
農 業

この合宿に参加する前は、韓国の方々とどれくらい仲よくなれるか、とても不安な気持ちでいた。しかし、話しているうちに、どこの青年も基本的な面で一緒だな、という感じを受け、この合宿に

参加して、今、本当によかったと思っている。

特に、私は農業をしている関係上、韓国側の4日クラブの人たちの話を聞け、とても勉強になった。流通の問題や、若い農業者が努力してもなかなか買入の人たちに認めてもらえない苦労や、多少の違いはあるが、日本の農村青年と同じ感覚もっているようだった。

また、合宿前は、韓国の人たちは、反日感情がとても強いのかなと思っていたが、あまりそのようなことはなく、協調していこう、という姿勢が感じられ、とても好感がもてた。あまりにも日本のマスコミ等が、反日感情が強いことばかり強調しすぎているのではないかなと思う。真実を真実として教育の中で伝えていないので、何かそのうしろめたさが、マスコミの伝達のしかたに出てきているのではないかなと思う。

このような合宿に参加して、もっともっとたくさんの方々と交流や話し合いがしたいと思った。話し合ってみると、人間としての優しさ等が感じられて、お金では買えない貴重なものが得られるような気がする。特に韓国の方は、顔や体つきも日本人と似ているのでよけい親近感もてるのかもしれない。

この2泊3日の合宿を通して、今後の自分の人生観を多少なりとも変えるものがあつたような気がする。とても有意義な時間を過ごせた。

## 合宿セミナー感想文

山岸 真也  
会社員

私にとってこの合宿セミナーは、ふつてわいたような話だった。JICAというものの存在もまったく知らなかったし、まあ、仕事をしなくていいから行くか、というような非常にいいかげんなものだった。別に偏見もっているわけではなかったが、「なんだ韓国か」という、今考えると非常に失

礼な気持ちだった。

しかし、歓迎パーティーに出席して、その気持ちはガラッと変わった。とても情熱的な人々で、人なつっこく、素敵の人たちだった。そのパーティーでは韓国語、日本語、英語が飛び交い、何とか自分の意思を伝えようという努力に感激した。しかしその中で、私は自分が恥ずかしいと思ったことがあった。韓国の人々は、日本に来るということで日本について勉強し、日本語を勉強してきた。私とは言えば、冒頭書いたようにいいかげんな気持ちで出席していたため、ろくに勉強もしていなかった。彼らに対してとても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。しかしそれでも、手帳を見ながら話をしているうちに名刺交換も行き、親しくなった。

そういうわけで、セミナーに出席したときには顔見知りも何人かできていたので、気軽に会話ができた。韓国の人々の印象で一番強かったのは、ものごとに対する集中力だった。レクリエーションでバレーボールをやったときのことだが、応援する者もプレーする者も必死になってやった。勝つということに多大な執着心を持っている国民だと痛感した。われわれ日本人は、たかがレクリエーションなのだから、なにもそんなにムキになることはないという、なかばしらけたムードだったが……。もしかすると20～30年前の日本人もそうだったのかもしれない。われわれが経済的に余裕があるからかもしれないが、われわれが失いつつある、もっとも重要なものなのかもしれない。

日本は20～30年前アメリカに追いつけ追い越せという目標を持っていた。そのころの日本には、そのこだわりがあったのだろう。もっともそれがエコノミックアニマルと呼ばれる理由なのかもしれないが、韓国は今、日本を目標にしているが、目標が到達されたとき、そのこだわりを失ってほしくないと思う。私はこのセミナーを通して、もっともってこだわりを持って日々を送らなければ

ということを学んだ気がする。

せっかくできた友情である。韓国語を勉強し、ぜひ韓国の友人を訪ねてみたいと思うし、来年も、ぜひ参加したいと思う。しかし、労働省をはじめとする偉い方々のあいさつは、もう少し短くお願いしたい。

## 合宿セミナー感想文

寺田 美秋  
会社員

合宿セミナーの話題に入る前に、事前研修と体験的日本語学習について触れたい。事前研修に参加する以前は、私の韓国に対する知識は非常に乏しいものであった。講師の方々のお話がたいへん参考になった。体験的日本語学習は、私自身のウォーミングアップとしても役にたったと思う。自分ひとりで韓国青年の都内見学をサポートできたことで合宿セミナーへの自信が深まった。

合宿セミナーのメニューはすべて充実していたと思う。その中で通訳の方のさまざまな場面での細やかな気づかいが果たした役割は大きいと思う。

メニューの中で、印象深かったのは討論会である。お互いに相手国の言葉で自分の意見を述べるのが困難であるため、率直で内容の濃い討論ができるのは、通訳の方がいる今回のような場合に限られるからである。内容的には、日本と韓国の国情が10年前に比べて、かなり近いものになってきていることを知ったのが印象深い。会社での人間関係、都会と農村における恋愛、結婚観、女性の労働条件などは両国間の違いはあまりないようであった。しかし、労働問題やそれらに伴う労働運動の問題、農村部での女性の地位、住宅事情、政治に関する関心、交通事情（東京とソウルの比較）などに関しては、少々の相違が認められた。特に、ソウルに比べて東京の住宅事情が悪いこと、

東京に比べてソウルの交通事情があまりよくないことが話題となった。また、韓国青年は、日本青年よりも政治への関心が深く、アフターファイブの酒の席等でも会社についての話題よりも、むしろ政治の話題が多いようである。

韓国の労働問題について一言述べたい。韓国では現在日本のような労使協調路線よりも、むしろ対決姿勢の状態である。日本のように「社長も労働者も、エリートも、同じ仲間だ」という意識が広まればよいと思う。その意味では、一部の日本企業が韓国の労働者を一方的に解雇した、というエピソードは非常に残念なことである。わが国の企業は、今後、海外に工場等をつくるときは、「社員は皆仲間である」という考えを国籍に関係なく、すべての労働者に適用すべきではないだろうか。

最後に、韓国青年の皆さんの素晴らしい歌、話、プレゼントに感謝したい。スタッフの方、通訳の方にもたいへんお世話になった。次の機会にもぜひ声をかけていただきたいと思う。

---

## 合宿セミナー感想文

飯島 美穂  
全社員

参加する前は、2泊3日なんて、とてつもなく長い時間だと思っていたが、すべてのスケジュールが終了した今では、とても短く感じられる。

ディスカッションを通して韓国の方たちが、どんなことに関心があって、どんなことを私たち日本人に聞きたかったのか、よくわかった。ただ、韓国の方たちは、日本に来るといってもあってか、日本人以上に日本のことをよく調べていたよ

うだが、日本人はというと、韓国のことを、まったくわかっていないような気がした。やはり、このようなセミナーに参加するならば、もっと韓国のことを勉強しなければいけないと痛感した。

会話ブック片手に、身振り手振り、ときには英語も飛び交う会話はとても大変だったが、自分の言いたいことが相手に伝わったとき、また相手の言いたいことが理解できたとき、たいした内容でなくても、なぜかとても感動をおぼえた。ただ、今回は韓国の方たちだったが、英語しか使えない国や、その国独特の言葉をもっている国の人たちとは、こんなに友情が深まらなかったのではないかと思った。相手の人が、漢字をわかってくれる国の人たちだからこそ、意思がより正確に伝わったのではないかと思う。

韓国の人たちはお酒が好きで、強いということは聞いていたが、2日間、夜一緒に飲んで、私が思っていた以上に強いということがわかった。でも、そこでひとつ感じたのは（実際韓国の居酒屋をのぞいてみなければわからないが）、韓国の人たちは本当に楽しんで酔っているんだということである。日本人は、大部分がストレス発散の方法のひとつとしてお酒を飲んでいるような気がする。上司の悪口、会社の不満を言っても、少しも楽しくないはずであるから……。そういう点では、韓国の人をとてもうらやましく思う。

仕事柄、韓国のVISAや航空券はすぐに準備することができるので、近いうちにぜひ韓国を訪れたいと思っている。また、ハングル文字を勉強して、今回、友達になった韓国の人たちと手紙のやりとりをして、よりいっそう友情を深めていきたいと思う。

## 4. ホストファミリーの思い出

### 申さんを迎えて

岡部 利一  
北海道

二度目のホームステイ受け入れだった。前回とは違い、英語しか通じないということで大変だったが、とても貴重な経験をさせていただいた。大学まで一応、英語らしきものは勉強してきたが、実際に使うことはなかった。しかし、日本語のほとんど話せない申さんを迎えて、なにがなんでも、片言の英語でも話さなければならないことになり、初めてお会いするまではもう不安いっぱいだった。しかし、明るい笑顔で一生懸命紙に書いて説明してくれる姿に、いつの間にか心配もふき飛んだ。自分でも不思議に思えるくらい話が通じるのがうれしくなって、気がついたらいろいろと質問をしていた。韓国の経済のことや自分の仕事のこと家族のことなど、写真を指さしながら、いろいろと教えていただき、本当に勉強になった。

町内の主な所や昭和新山、ニセコの温泉など案内してあげたが、メモや写真に収める等、熱心な研修ぶりにはとても感心させられた。子供たち3人は言葉が通じなくても、「申さん、申さん」といって、いつもついて回り、なにか普段の生活では得られないものを体験したようだった。

隣の国でありながら、ほとんど韓国のことを知らなかった自分の無知を考えさせられる機会であったばかりか、気持ちがあれば、心と心が通じあえることを知った、とても楽しい3日間だった。

### 朝鮮半島と私たち

菊地 尊征  
北海道

張さんが来られる前に準備していたことがふたつあった。ひとつは「謝罪」、もうひとつは韓国語を覚えておくことであった。

あいさつした後、「過去に日本人が朝鮮人の方々に行ったことに対し、深くお詫びします」と言ったところ、張さんはニコニコしながら、「もう過ぎ去ったことですから」と言ってくれた。私は内心ホッとした。

にわか勉強で覚えた韓国語は、ほとんど役に立たなかった。張さんは日本語も話せるので、失礼とは思いながらも、ほとんど日本語で済ませた。が、張さんを本当に理解しようとするなら、やはり韓国語が必要なのはあたり前のことだった。

とにかく、これを機会に韓国のことを、いや、朝鮮半島全体のことを、私たち日本人は知らなければいけないと思う。日本に一番近い隣国なのだから。





實績資料

## 1. 韓国窓口機関（現地プログラム実施機関）

大韓民国文教部社会国際教育局社会教育振興課

## 2. 現地プログラム実施日程

		プログラム内容		実施場所
7/2	月		開講式、本事業説明、JICAブリーフィング、グループ別プログラム説明、グループ別対話	ソウル
3	火	講義「韓国と日本の経済協力方案」 生活日本語学習（1）	韓国歌謡練習（1）、日本歌謡練習（1）、 講義「韓国と日本との関係」、日本訪問時留意事項	〃
4	水	講義「韓国の歴史と文化」 生活日本語学習（2）	日本歌謡練習（2）、韓国歌謡練習（2）、 日本文化紹介、日本映画上映、歓送会	〃
5	木	生活日本語学習（3）派遣者基本教育		〃

### 3. 実施日程

#### 第4陣 韓国学生グループ

月日	曜	プログラム内容	実施場所
7/9	月	来日 生活ガイダンス	東京
10	火	国立歴史民俗博物館見学	"
11	水	本計画のブリーフィング 開講式 昼食懇談会 団体プログラム紹介 日本語学習	"
12	木	講義「日本の産業と経済」 映画鑑賞 日本語サロン	"
13	金	日本語学習 講義「日本の近・現代史」 武道鑑賞および交歓会	"
14	土	体験的日本語学習打ち合わせ 体験的日本語学習	"
15	日	<自主研修>	"
16	月	日産自動車見学 日本語サロン	"
17	火	講義「日本と韓国」 講義「日本の社会と文化」	"
18	水	オリエンテーション 東京タワー・下町資料館・浅草見学 歌舞伎鑑賞	"
19	木	早稲田大学・慶応大学・外国語大学(班別交流) 東京大学見学 野球観戦	"
20	金	山梨へ移動 合宿セミナー日程説明 親善プログラム グループ討論I	山梨
21	土	グループ討論II グループ討論III レクリエーション グループ討論IV 文化交流会	"
22	日	グループ討論V 全体発表会 交流の夕べ	"
23	月	富士山五合目見学 東京へ移動	東京
24	火	<自主研修>	"
25	水	富山へ移動 オリエンテーション 歓迎夕食会	富山
26	木	県勢概要説明 県庁表敬訪問 国立富山大学・県立富山大学訪問 ホームステイ引き渡し	"
27	金	<ホームステイ>	"
28	土	<ホームステイ>	"
29	日	地元青年との交流プログラム(バーベキューパーティー・スポーツ交流)	"
30	月	鍋谷鋳造所(説明・見学) 木彫工房見学 非波伝統産業館・木彫工芸職業訓練校見学	"
31	火	地元青年、民泊家庭と立山・黒部アルペンルートハイキング	"
8/1	水	Y.K.K工場(説明・見学) 広貫堂製薬会社(説明・見学) 評価会 歓送会	"
2	木	広島へ移動	広島
3	金	広島・厳島神社見学 平和記念公園・原爆資料館見学	"
4	土	大阪へ移動 国際花と緑の博覧会見学	京都
5	日	金閣寺・二条城見学 古代友禅苑見学 清水寺見学 ギオンコーナー見学	"
6	月	東京へ移動	東京
7	火	帰国についての説明・諸手続き 評価会 歓送会	"
8	水	帰国	"

第4陣 韓国教員グループ

月日	曜	プログラム内容	実施場所
7/9	月	来日 生活ガイダンス	東京
10	火	国立歴史民俗博物館見学	"
11	水	本計画のブリーフィング 開講式 昼食懇談会 団体プログラム紹介 日本語学習	"
12	木	講義「日本の産業と経済」 映画鑑賞 日本語サロン	"
13	金	日本語学習 講義「日本の近・現代史」 武道鑑賞および交歓会	"
14	土	体験的日本語学習打ち合わせ 体験的日本語学習	"
15	日	<自主研修>	"
16	月	日産自動車見学 日本語サロン	"
17	火	講義「日本と韓国」 講義「日本の社会と文化」	"
18	水	青森へ移動 オリエンテーション 歓迎会	青森
19	木	県庁表敬訪問 教育委員会表敬訪問（教育行政説明） 市長表敬訪問	"
		青森市立横内中学校訪問（説明・見学・交流） 歓迎レセプション	
20	金	県立青森工業高等学校見学 情報処理センター施設見学 ホームステイ引き渡し	"
21	土	<ホームステイ>	"
22	日	<ホームステイ>	"
23	月	津軽塗団地見学 弘前市長表敬訪問 板柳町ふるさとセンター見学	"
24	火	津軽こけし館見学 浄仙寺（地元青年や子供たちとの交流）	"
25	水	青函トンネル記念館（説明・見学） 夕食交流会	"
26	木	ねぶた団地視察 歓送会	"
27	金	東京へ移動	東京
28	土	深川江戸資料館見学 上野国立博物館見学	"
29	日	高尾山登山 神奈川へ移動 合宿セミナー 日・韓国による基調講演	神奈川
30	月	グループ別自由行動 グループ討論 全体報告会 交流の夕べ	"
31	火	スポーツ交流 東京へ移動	東京
8/1	水	<自主研修>	"
2	木	広島へ移動 平和記念公園・原爆資料館見学	広島
3	金	宮島・厳島神社見学 京都へ移動	京都
4	土	金閣寺・北野天満宮・二条城見学 古代友禪苑見学 ギオンコーナー見学	"
5	日	奈良へ移動 法隆寺見学 国際花と緑の博覧会見学	"
6	月	東京へ移動	東京
7	火	帰国についての説明・諸手続き 評価会 歓送会	"
8	水	帰国	"

第4陣 韓国勤労青年グループ

月日	曜	プログラム内容	実施場所
7/9	月	来日 生活ガイダンス	東京
10	火	国立歴史民俗博物館見学	"
11	水	本計画のブリーフィング 開講式 仕食懇談会 団体プログラム紹介 日本語学習	"
12	木	講義「日本の産業と経済」 映画鑑賞 日本語サロン	"
13	金	日本語学習 講義「日本の近・現代史」 武道鑑賞および交歓会	"
14	土	体験的日本語学習打ち合わせ 体験的日本語学習	"
15	日	〈自主研修〉	"
16	月	日産自動車見学 日本語サロン	"
17	火	講義「日本と韓国」 講義「日本の社会と文化」	"
18	水	労働省（概要説明・大臣表敬訪問） 浅草見学 お茶会 歓迎レセプション	"
19	木	（勤労青年）石川島播磨工業横浜工場（説明・見学・職員との交流） （農村青年）茨城県立農業大学校（説明・見学・質疑）農業改良普及所（説明・見学）	"
20	金	神奈川へ移動 合宿セミナー日程説明 両国青年意見発表 グループ討論I 交流会	神奈川
21	土	グループ討論II グループ討論III 交流の夕べ	"
22	日	全体発表会 お別れセレモニー 芦ノ湖見学 東京へ移動	東京
23	月	〈自主研修〉	"
24	火	奈良へ移動 オリエンテーション 歓迎会	奈良
25	水	県知事表敬訪問・県勢概要説明 奈良市長表敬訪問 東大寺・二月堂見学	"
26	木	（勤労青年）シャープ技術歴史ホール見学 県立医科大学病院見学 （農村青年）平群温室ばら生産組合・県中央卸売市場・農業試験場・はず栽培見学	"
27	金	講義「韓国の古代文化と日本」 地元青年との合宿交流会	"
28	土	国際花と緑の博覧会見学	"
29	日	ホームステイ引き渡し 〈ホームステイ〉	"
30	月	〈ホームステイ〉	"
31	火	〈ホームステイ〉 奈良県主催レセプション	"
8/1	水	自主研修 プログラム評価会	"
2	木	徳島へ移動 阿波十郎兵衛屋敷見学 阿波おどり参加	徳島
3	金	広島へ移動 平和記念公園・韓国人慰霊碑参拝	広島
4	土	京都へ移動 清水寺見学 三十三間堂見学 古代友禪苑見学 ギオンコーナー見学	京都
5	日	二条城・金閣寺・西陣織会館見学 自主研修	"
6	月	東京へ移動	東京
7	火	帰国についての説明・諸手続き 評価会 歓送会	"
8	水	帰国	"

第4陣 韓国青年指導者グループ

月日	曜	プログラム内容	実施場所
7/9	月	米日 生活ガイダンス	東京
10	火	国立歴史民俗博物館見学	"
11	水	本計画のブリーフィング 開講式 昼食懇談会 団体プログラム紹介 日本語学習	"
12	木	講義「日本の産業と経済」 映画鑑賞 日本語サロン	"
13	金	日本語学習 講義「日本の近・現代史」 武道鑑賞および交歓会	"
14	土	体験的日本語学習打ち合わせ 体験的日本語学習	"
15	日	<自主研修>	"
16	月	日産自動車見学 日本語サロン	"
17	火	講義「日本と韓国」 講義「日本の社会と文化」	"
18	水	文部省訪問（概要説明） 総務庁訪問（概要説明）	"
19	木	東京都環境科学研究所（説明・見学・質疑） 歌舞伎鑑賞	"
20	金	埼玉へ移動 合宿セミナー開講式 基調講演	埼玉
21	土	グループ討論Ⅰ グループ討論Ⅱ 交流の夕べ	"
22	日	グループ討論Ⅲ 全体発表会 閉講式 東京へ移動	東京
23	月	<自主研修>	"
24	火	北海道へ移動 オリエンテーション	北海道
25	水	北海道庁表敬訪問・道勢概要説明・社会教育事情説明・質疑応答 歓迎レセプション	"
26	木	開拓記念館・開拓の村・青少年科学館・すずらん丘陵公園見学 地元青年との交流会	"
27	金	北海道立青年の家訪問・青少年スポーツセンター・少年自然の家・子供の国見学	"
28	土	北海道農業専門学校訪問（見学・学生・職員とのソフトボール大会、昼食交流会）	"
29	日	中山高原ミュージックキャンプ・喜茂別町ちびっ子キャンプ・羊蹄山麓青年の家見学 京極ふきだし公園・道立青少年の森見学 オリエンテーション 夕食懇談会	"
30	月	原子力環境センター・神恵内青少年旅行村・スイカ選果場見学 ホームステイ引き渡し	"
31	火	<ホームステイ>	"
8/1	水	ホームステイ 地元青年との対話交流会 さよならパーティー	"
2	木	広島へ移動	広島
3	金	宮島・厳島神社見学 平和記念公園・韓国人慰霊碑参拝	"
4	土	京都へ移動 国際花と緑の博覧会見学 ギオンコーナー見学	京都
5	日	金閣寺見学 二条城見学 西陣織会館見学 清水寺見学	"
6	月	東京へ移動	東京
7	火	帰国についての説明・諸手続き 評価会 歓送会	"
8	水	帰国	"

## 4. 韓国青年招へい実績一覧

### ●昭和62年度（100名）

	人数	実施協力団体	実施県	JICA支部	地方協力団体	県等窓口機関	プログラム コーディネーター	JICA コーディネーター
勤労青年	35	青少年育成国民会議	神奈川県	関東	韓国青年歓迎委員会	神奈川県県民部青少年室	黒沢 郁夫	浜岡美知枝 森下隆雄 金勝記
農村青年	25	中央青少年団体連絡協議会	青森	東北	青森県青少年団体連絡協議会	青森県総務部文書課国際交流班	佐藤 忠良	牛尾 恵子 榎本 美和
青年指導者A	20	中央青少年団体連絡協議会	栃木	関東	栃木県青少年団体連絡協議会	栃木県県民生活部婦人青少年課	西広 咲子	坂本 純義 坂本 山紀恵
青年指導者B	20	国際交流サービス協会	福岡	九州	福岡県海外協会	福岡県企画振興部国際交流課	増田 忠幸	相田 欣乃 松本 周司

\*青年指導者Bグループには、団長・副団長・幹事が含まれる。

### ●昭和63年度（99名）

	人数	実施協力団体	実施県	JICA支部	地方協力団体	県等窓口機関	プログラム コーディネーター	JICA コーディネーター
教員A (小学校教師)	25	中央青少年団体連絡協議会	岩手	東北	岩手県青年団協議会	総務部総務学事課国際交流係	佛木 完	浜岡美知枝 坂本 純義
教員B (中学校教師)	25	青少年育成国民会議	和歌山	関西	和歌山県海友会	民生部青少年婦人課	趙 南星	森下 隆雄 榎本 美和
教員C (高等学校教師)	24	国際交流サービス協会	長崎	九州	長崎県海外協会	企画部国際交流課	原谷 治美	牛尾 恵子 金 鐘恵
学生 (文科系)	25	世界青少年交流協会	岐阜	中部	日本国際連合協会岐阜県本部	総務部総務課	白井 千里	坂本 山紀恵 徐 依煥

\*団長は教員Bグループ、副団長は教員Cグループ、幹事は教員Aグループおよび学生グループに1名ずつ含まれる。

### ●平成元年度（99名）

	人数	実施協力団体	実施県	JICA支部	地方協力団体	県等窓口機関	プログラム コーディネーター	JICA コーディネーター
勤労青年	31	勤労厚生協会	宮城	東北	仙台青年会議所	国際交流室	青山富士 翔昇	森本 隆雄 榎本 美和
学生	30	世界青少年交流協会	香川	四国	香川県海外派遣友の会	民生部青少年対策室	白井 千里	坂本 山紀恵 片 順玉
教員	20	国際交流サービス協会	北海道	北海道	北海道青少年団体連絡協議会	総務部知事室国際交流課	原谷 治美	浜岡美知枝 徐 依煥
青年指導者	18	青少年育成国民会議	鳥根	中国	鳥根県国際交流青友会	総務部総務課	淡 明弘	牛尾 恵子 高 龍煥

\*青年指導者グループに団長・幹事、学生グループに副団長、勤労青年グループに幹事が含まれる。

### ●平成2年度（100名）

	人数	実施協力団体	実施県	JICA支部	地方協力団体	県等窓口機関	プログラム コーディネーター	JICA コーディネーター
学生	31	世界青少年交流協会	富山	中部	富山県世界青年友の会	企画県民部婦人青少年課	白井 千里	牛尾 恵子 植岡 美矢
教員	21	国際交流サービス協会	青森	東北	青森県青少年団体連絡協議会	総務部文書課国際交流室	赤沢みよ子	森下 隆雄 榎本 美和
勤労青年	31	勤労厚生協会	奈良	関西	奈良世界青年友の会	商工労働部労政課	鹿沼安 弘昇 寺井	坂本 山紀恵 片 順玉
青年指導者	17	中央青少年団体連絡協議会	北海道	北海道	日本青年協会北海道支部	北海道受入実行委員会	北田由美江	浜岡美知枝 徐 依煥

\*団長は青年指導者グループ、副団長は学生グループ、幹事は教員グループおよび勤労青年グループに1名ずつ含まれる。

## 5. 平成2年度青年招へい事業受け入れ実績一覧

受入時期	国名	分野名	人数	実施協力団体名	実施県
5月15日～6月14日 1陣 129名	マレーシア フィリピン タイ	学生 教員 学生 教員 学生(芸術関係) 勤労青年	19 20 20 20 25 25	青少年育成国民会議 国際交流サービス協会 世界青少年交流協会 日本国際生活体験協会 ユースワーカー能力開発協会 勤労厚生協会	沖縄 長野 新潟 山梨 福島 和歌山
5月29日～6月28日 2陣 155名	ASEAN混成 ASEAN混成 インドネシア シンガポール	学生 教員 教員・学生(農業関係等) テーマA(学生) 教員 学生 教員	30 30 20 15 25 15 20	日本ユネスコ協会連盟 日本ユネスコ協会連盟 青年海外協力協会 世界青少年交流協会 中央青少年団体連絡協議会 世界青少年交流協会 国際交流サービス協会	宮城 兵庫 山形 大取 大島 北海道 北岩
7月3日～8月2日 3陣 131名	フィリピン シンガポール タイ	勤労青年I(農業系) テーマA 公務員I 勤労青年 青年指導者 テーマB	23 20 24 24 25 15	青年海外協力協会 青少年育成国民会議 国際交流サービス協会 ユースワーカー能力開発協会 日本友愛青年協会 日本青年団協議会	山形 福岡 秋田 宮崎 新潟 愛媛
7月9日～8月8日 4陣 100名	韓国	学生 教員 勤労青年 青年指導者	31 21 31 17	世界青少年交流協会 国際交流サービス協会 勤労厚生協会 中央青少年団体連絡協議会	富山 山梨 奈良 北海道
8月21日～9月20日 5陣 165名	ASEAN混成 インドネシア マレーシア シンガポール	公務員I テーマB(公務員) 農村青年 テーマA(勤労青年) 青年指導者 公務員II 青年指導者	30 20 23 20 25 24 23	国際交流サービス協会 青年海外協力協会 全国農村青少年教育振興会 日本経済青年協議会 青少年育成国民会議 ユースワーカー能力開発協会 日本国際生活体験協会	栃木 大分 茨城 福岡 静岡 岡山
8月28日～9月27日 6陣 126名	ASEAN混成 インドネシア フィリピン タイ	公務員II テーマA 勤労青年II(産業系) テーマB テーマA 農村青年	30 10 25 21 15 25	青少年育成国民会議 日本経済青年協議会 日本ユースホステル協会 青年海外協力協会 勤労厚生協会 全国農村青少年教育振興会	九州 大阪 京都 高知 愛媛 佐賀
9月11日～10月11日 7陣 78名	PNG フィジー 太平洋混成	教員 青年指導者 公務員 公務員 教員	20 10 12 24 12	国際交流サービス協会 日本経済青年協議会 日本ユネスコ協会連盟 世界青少年交流協会 日本ユースホステル協会	長崎 岐阜 鹿児島 岡山 石川
10月16日～11月15日 8陣 93名	インドネシア マレーシア	勤労青年 学生 公務員 テーマB(農村青年)	25 22 26 20	勤労厚生協会 日本国際生活体験協会 世界青少年交流協会 全国農村青少年教育振興会	群馬 広島 香川 熊本
11月6日～12月6日 9陣 100名	中国	総団(うち2名副団員兼任) 青年指導者 経済青年 公務員 教員	4 25 25 24 24	日本青年団協議会 日本経済青年協議会 国際交流サービス協会 青年海外協力協会	三重 兵庫 島根 岡山
11月20日～12月20日 10陣 99名	中国	地域産業技術実務者 産業基盤整備実務者 経済・貿易実務者 文化・教育関係実務者	24 25 25 25	全国農村青少年教育振興会 青少年育成国民会議 ユースワーカー能力開発協会 世界青少年交流協会	岐阜 広島 徳島
合計	ASEAN 6カ国(799) 中国(199) 韓国(100)	太平洋諸国(78)		53グループ 1176名	

(注) テーマA：ハイテク・科学技術産業の現状 テーマB：地方の農業・地場産業振興